

教育実習との関連を踏まえた教職実践演習の授業開発

百 瀬 光 一
石 川 勝 彦

1 はじめに

本稿¹⁾は、教育実習の事後に位置づけられる教職実践演習をどのように開発・運用しているかを報告する。加えて、受講後のアンケート調査を通して教職実践演習が学生の学びに与える影響を分析し、現状の授業の教育プログラムとしての到達点を確認すると共に、今後の授業改善にむけた課題を析出することを目的とする。

教職実践演習は、中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006年7月11日）（以下、「答申（2006年）」と略記）を基に新設・必修化された科目である。この答申（2006年）では、以下のことが指摘されている。

教職実践演習（仮称）を新設することとする場合、教育実習と当該科目との関係を整理することが必要である。この点については、両者は趣旨・目的が異なるものの、将来教員になる上で、何が課題であるのかを自覚する機会として共通性があることや、履修時期が近接していること等から、内容や指導の面での関連性や連続性に留意して、実施することが適当である。具体的には、教育実習やその後の事後指導

を通して明らかになった課題を教職実践演習（仮称）で重点的に確認したり、必要に応じて補完的な指導を行うなどの工夫を図ることが適当である²⁾。

以上から教職実践演習は、教育実習との関連性や連続性に留意することが求められている。このことに関連した先行研究として、次の研究が注目に値する。笠井尚・三島浩路は、教育実習で学生が得た成功や失敗の経験知を材料として活かしながら、教職課程の履修全体を振り返るという教職実践演習のプログラムを構想した³⁾。大久保英敏・日下芳朗・小酒井正和・塩澤秀和は、教育実習の事後指導時に学生にアンケート調査を実施し、その結果分析を踏まえて、より現状にふさわしい教職実践演習の授業設計を試みた⁴⁾。菅野治恵は、履修カルテや教育実習後の個別面談を踏まえながら教職実践演習を計画した⁵⁾。永田成文は、学生の授業実践力を高めるために、学生の協働的な学び合いによって教育実習で行った授業を改善し、その改善した授業を教育実習とは異なる環境で実践する、教育実習を基盤とした教職実践演習のプログラムを提案した⁶⁾。

これらの先行研究を基に本学の教職実践演習の授業改善について検討すると、受講する学生の実態に「教育実習が終わればもう終わり」という意識になる傾向があり、藤井剛なども同様の指摘をしているように教職実践演習そのものに対するモチベーションに課題を抱えている⁷⁾。このことから、教育実習後の教職実践演習に向けた「心構え」を学生に構築させる必要がある。

そこで百瀬が担当する教職実践演習では、菅野の研究を踏まえながら、教育実習終了後の個別面談を教職実践演習がスタートする前に設定することにした。具体的には、課外の時間等を活用しながら教育実習の事後指導の一環として教育実習校の指導教諭による評価（訪問指導で頂いたコメン

トや大学に送られる「教育実習評価票」に記された総合所見など）を基にした個別面談を実施し、教職実践演習に向けた個々の学生の「心構え」を構築させると共に、教職実践演習も教育実習校の指導教諭による評価を基にしたプログラムを開発し、教育実習との関連性や連続性を図ることにした。

以上に基づき、以下では2点について報告する。第1に教授方法を中心に授業の組み立てを詳述する。第2に授業後に行った授業アンケート調査の結果に基づき、授業を構成するワークから学生がどのような学びを引き出したのか検討する。具体的には答申（2006年）が提唱する教員として求められる4つの事項（使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項、幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、教科・保育内容等の指導力に関する事項）⁸⁾にも目を配りつつ、授業の効果を記述する。

2 教職実践演習の授業開発

本学の教職実践演習（中・高）のシラバスは、答申（2006年）で教職実践演習に含めることが適当であるとされた教員として求められる4つの事項を踏まえ、Table 1に示す通りとしている。なお、これは招聘する講師の都合等で本学HPに掲載されているシラバスの授業計画の順序に若干の修正が加えられたものである。具体的な授業設計については、各担当教員に委ねられている。2019年度百瀬は、法学部法学科4年生を対象とした教職実践演習（23名）と、スポーツ科学部スポーツ科学科4年生を対象とした教職実践演習（16名）の2つの授業を担当した。前者の学生は中学校社会・高等学校公民の免許状の取得を、後者の学生は中学校・高等学校の保健体育の免許状の取得をそれぞれ目指している。

Table 1 教職実践演習シラバス

【授業の到達目標】	
①使命感や責任感、教育的愛情の醸成	
②社会性や対人関係能力の形成	
③生徒理解や学級経営等に関する能力の形成	
④教科内容等の指導に関する能力の形成	
【授業計画と4つの授業の到達目標との関連】	
第1回：オリエンテーション：教職の意義、学校教育の現状と課題	①②③④
第2回：履修状況の振り返りと教育課題の確認：グループ討議(1)	③④
第3回：履修状況の振り返りと教育課題の確認：グループ討議(2)	③④
第4回：教育課題の解決に向けた研究発表と協議(1)	①②③④
第5回：教職の使命、教員の役割、社会性や対人関係能力の醸成について	①②
第6回：教科指導及び生徒理解や学級経営等の事例研究	③④
第7回：教育課題の解決に向けた研究準備	①②③④
第8回：学校見学：教科指導及び生徒理解や学級経営についてのフィールドワーク	①②③④
第9回：生徒理解や生徒相談に関するロールプレイング	②③
第10回：模擬授業の実施・討議(1)	②③④
第11回：現職教員からの課題提言及び意見交換	①②③④
第12回：現職教員・関係機関職員からの課題提言及び意見交換	①②③④
第13回：模擬授業の実施・討議(2)	②③④
第14回：教育課題の解決に向けた研究発表と協議(2)	①②③④
第15回：教員として求められる事項と教職実践のまとめ	①②③④

2019年度の教職課程履修学生（4年生）の教育実習の評価として、教育実習校の指導教諭から主に指摘されたこと（訪問指導で頂いたコメントや大学に送られる「教育実習評価票」に記された総合所見など）を Table 2 に整理した。

Table 2 指導教諭からの評価

○	<p>良い点・今後も伸ばしたい点</p> <p>先生方や生徒、保護者に対して挨拶がしっかりとできている</p> <p>コミュニケーションが苦手な生徒やおとなしい生徒にも積極的に声を掛けている</p> <p>ICTを活用した授業設計にも意欲的に取り組もうとしている</p> <p>学習指導案は、大学での事前指導で練習がなされており、比較的よく書けている</p> <p>部活動にも積極的に参加し、個々の生徒とのコミュニケーションを図りながら熱心に指導している</p>
●	<p>課題となる点・努力を要する点</p> <p>教師として、社会人としての使命や責任について、もっと意識を高めてほしい</p> <p>色々な読み手を対象とした文章を書く力も付けてほしい</p> <p>1時間の到達目標とそれを達成させるための手立てを明確にした授業を構成する力を付けてほしい</p> <p>深い教材研究はもちろん、明確な発問・指示等ができるようになってほしい</p> <p>生徒指導や学級経営の基礎的な知識・技能も可能な限り身に付けてほしい</p> <p>無気力な生徒や学習意欲の低い生徒への対応もできるようになってほしい</p> <p>新聞を読んでいる学生が少ない（時事問題を授業や生徒指導に生かす力も必要）</p>

以上の教育実習校の指導教諭からのコメント、答申（2006年）で指摘された授業方法（役割演技（ロールプレーイング）やグループ討議、事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業等）⁹⁾を基に、2019年度の教職実践演習の授業内容を検討することにした。また、先の藤井は、学生の教職実践演習に対するモチベーションを維持するテーマとして、①興味・関心を持ち続けられる授業・授業メソッド・講師、②「何かを身に付けられた」「教職課程の集大成だった」と感じられる「授業内容」、③話しやすい仲間・クラスづくりを考えていくことの必要性を指摘している¹⁰⁾。

これらを踏まえながら2019年度の教職実践演習は、次に示す8つのワークを授業内容として開発し、学生の主体的・対話的で深い学びを促すことにした。すなわち、理想の教師像の振り返り、履修カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見、学級経営案の作成、学級通信の作成、ロールプレーイング（気になる子への対応）、気になるニュースに関する朝の会、外

部講師（OGの高等学校教員、教育委員会）による講演、プレゼンテーション・ソフトを用いた模擬授業開発である。これらは、正規の授業時間だけでなく、課外の時間も積極的に活用して取り組ませるようにした。以下、8つのワークについて詳述する。

2.1 理想の教師像の振り返り

教育実習の事後指導で実施した個別の個別面談を踏まえ、第1～3回目の授業を基にしながらか第4回目の授業内容として「理想の教師像の振り返り」を設定した。まず、学生に「自分が考える理想の教師像」を思いつままま1枚の付箋に1項目、できるだけ多く書かせるようにした。次に、KJ法を使って、これらを3カテゴリーぐらいに整理させ、同時にカテゴリー名も付けるようにした。そして、整理した3カテゴリーをワークシートを活用しながら、SDS法を用いてプレゼンテーション・ソフトでまとめるようにした。SDS法とは、最初に「Summary」を伝え、次に「Details」を説明し、最後に再度「Summary」を述べるという話し方の構成法¹¹⁾である。

百瀬・下崎のSDS法を活用したプレゼンテーションの先行研究において、特別支援学校高等部（知的障害）の生徒を対象としてもその有用性が確認されている^{12) 13) 14)}。自分の考えを分かりやすく伝え合うことを目的の一つとする本授業でも、これらの研究を踏まえながらSDS法を活用したプレゼンテーションを設定することにした。実際に学生がプレゼンテーション・ソフトで作成する画面は、Table 3で示す「ワークシート1」¹⁵⁾の①～⑤をそれぞれ1画面とし、表紙も含めて全6画面とした。最後に、第5回目の授業の前半は全員でプレゼンテーションを行い、後半はこれらを基にグループ討議を行うことにした。

Table 3 ワークシート 1

【Summary】
①これから、自分が考える理想の教師について3つのことをお話しします。 第一に（ ）について 第二に（ ）について 第三に（ ）についてです。
【Details】
②最初に、第一の（ ）についてですが、詳細に説明すると、
③つぎに、第二の（ ）についてですが、詳細に説明すると、
④最後に、第三の（ ）についてですが、詳細に説明すると、
【Summary】
⑤以上、自分が考える理想の教師について、 第一に（ ） 第二に（ ） 第三に（ ）ということをお話しました。 これで終わります。

2.2 履修カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見

先述の「理想の教師像の振り返り」と履修カルテ・教育実習録を基に、第5、6回目の授業のそれぞれの後半に「今後の大学生活を充実させるための自分への提案」というテーマ発表をプレゼンテーション・ソフトを用いて準備させ、第7回目の授業で発表させることにした。具体的には、Table 4で示す「ワークシート2」¹⁶⁾を用いて今後の自己課題を可視化させることにした。プレゼンテーションの方法としては、6色ハット発想法を活用することにした。これはエドワード・デボノが考案した発想

法¹⁷⁾で、白の帽子は事実、赤の帽子は感情、緑の帽子は提案、黄色の帽子は評価、黒色の帽子はデメリット、青色の帽子はまとめを表わすものとしてそれぞれ活用する¹⁸⁾。

百瀬・下崎の特別支援学校高等部（知的障害）の生徒を対象とした先行研究においても生徒の自己理解を促す上で、その有用性が確認されている¹⁹⁾。この研究を踏まえながら本授業でも学生の自己分析や自己理解を促すため、6色ハット発想法を活用したプレゼンテーションを設定することにした。実際に学生がプレゼンテーション・ソフトで作成する画面は、ワークシート2の①～⑥をそれぞれ1画面とし、表紙も含めて全7画面とした。

Table 4 ワークシート 2

① 自分自身に関する現状分析【白い帽子】
② ①に関して感じていること・考えていること【赤の帽子】
③ 提案する今後自分自身が取り組むべきこと・努力すべきこと【緑の帽子】
④ ③のメリット【黄色の帽子】とデメリット【黒の帽子】
⑤ まとめ（④をもとに）【青の帽子】
⑥ 結論（決意表明及び今後の具体的プラン）

2.3 学級経営案の作成

教職実践演習のプログラムに学級経営案の作成を導入した先行研究として、國原幸一郎の研究が注目に値する。ここでは、「学級経営案にもりこむ内容として、学校教育目標、学年教育目標、学級教育目標、学級の実態、学級経営の重点、学級開きのねらいと内容、委員会・係活動、教室内の環境づくり、保護者との連携、学年経営との関連、学級事務があることを説明し、所定の様式に記入させた」²⁰⁾と報告している。石井康博は、教員志望学生に学級経営案を作成させることの目標として、「現場の先生方の実践が点としてではなく、面としてみるができることと捉えている」²¹⁾とし、さらに「一つの指導はクラス経営の全体像の中の一部であって、一連の指導にはつながりをもっているともいえる」²²⁾としている。また、安彦忠彦は、学校教育目標と学級目標との関係性について、学校づくりの視点から、学校の教育目標を各学級の教育目標におろして具体的な目標の系列化を図ることの重要性を指摘している²³⁾。

これらの研究を踏まえながら第8回目の授業の後半に学級経営案作成の意義について解説し、百瀬が作成した学級経営案を見本として提示しながら、Figure 1に示す「学級経営案の様式」に従って作成させることにした。なお、学生には、教育実習で担当した学級の担任になったことを想定して作成させることにした。

2019年度 年 組 学級経営案（男子 名、女子 名、計 名：担任 ）

【学校教育目標】

※教育実習校の学校教育目標を記述する。



【学級の実態】

※教育実習で担当した学級の実態（良い点と今後成長させたい点）を記述する。



【学級教育目標】

※自身が担任となったことを想定した場合の学級の教育目標を記述する。



	学級経営の重点	具体的指導及び取り組み
学習・生徒指導	※学級教育目標を達成させる視点から記述する。	
教室内の環境づくり	※学級教育目標を達成させる視点から記述する。	
保護者との連携	※例えば、学級通信の発行等について記述する。	
その他	※卒業までに解決すべき自己課題を記述する。	

Figure 1 学級経営案の様式

2.4 学級通信の作成

学級経営案の作成と同時進行で第8回目の授業の後半に学級通信も作成させることにした。教職実践演習に学級通信を導入した先行研究として、國原と高橋喜代治、多和田真理子の研究が注目に値する。國原によれば、「学校現場では、児童生徒や保護者との良好な人間関係を構築するために学級通信が利用されている」²⁴⁾とし、実際の國原の授業では、ある学校の学級通信を基にししながら学生に「話し言葉だけでなく、文字による意思伝達も必要で、学級通信は学級経営の手法の一つとなり得ることを読み取らせようとした」²⁵⁾と報告している。また、高橋は、教職実践演習で実際に学生に学級通信を作成させている。高橋によれば、「学級通信で文章を書くということは担任の学級指導の内容を省察することであり同時に教師としての教育観や社会観が表現の端々に表象されることである」²⁶⁾とし、「それを保護者に開示し見てもらうことになるのだから、学級通信の作成にかかわる学習は、教師としての使命感や責任感、社会性や対人関係などの資質・能力の涵養を期待できると思われる」²⁷⁾としている。

多和田は、中高の教員免許を取得する学生を対象に実習校のHR学級または授業担当クラスを想定し、任意に場面を設定して学級通信または教科通信を教職実践演習で作成させた。学生に対して、①対象（だれに）、②内容（なにを）、③形式（どのように）、④工夫してほしいこと、学んでほしいこと（「必要な情報を精査する」「過不足なく情報を盛り込む」「コミュニケーションツールとしての効果を考える」）、の4点を作成にあたり考えてほしいこととして提示した²⁸⁾。さらに、この実践を通して、「中学・高校においてもやはり学級通信を発行する意義は大いにあるとの確信をもった」²⁹⁾としている。

これらの研究を基にしながらか学級通信作成の意義と作成方法について解説した。そして、百瀬がワープロで作成した学級通信を見本に教育実習で担当した学級の生徒及び保護者を想定し、作成させることにした。全員共通の記述内容として、生徒と保護者に向けたメッセージを挿入することとし、このこと以外はタイトルや用紙のサイズも含め自由とした。さらに、教育実習最終日に生徒に配布することを想定し作成させることにした。

2.5 ロールプレイング（気になる子への対応）と気になるニュースに関する朝の会

「ロールプレイング（気になる子への対応）」と「気になるニュースに関する朝の会」は、いずれもロールプレイングを導入したもので、第9回目の授業に設定することにした。教職実践演習にロールプレイングを導入した先行研究を概観すると、「保護者への対応」をテーマとしたものが散見される。例えば、國原³⁰⁾、三島知剛・榎田健志・高旗浩志・稲田修一・後藤大輔・江木英二・曾田佳代子・山根文男・加賀勝・高塚成信³¹⁾、宮下与兵衛³²⁾などの研究がある。保護者との良好な関係づくりが求められている現状を踏まえると、このテーマは極めて重要である。

ところで、本学の前期科目に、「教育実習研修」（教職実践演習と同じメンバーが受講している）が設置されている。この授業のプログラムは、教育実習の事前・事後指導を扱うものである。2019年度の教育実習研修で扱った教育実習報告会では、生徒指導や保護者との関わりに苦労したことを報告した学生が何人かいた。このため、これらの報告を踏まえ、併せて「いじめや不登校」「特別支援教育」「保護者への対応」に関するテーマについての事例研究とロールプレイングも事後指導として扱った。このことから、教職実践演習のロールプレイングでは、「いじめや不登校」「特

別支援教育」「保護者への対応」等は扱わず、先述の教育実習校の指導教諭からのコメントの「無気力な生徒や学習意欲の低い生徒への対応もできるようにしてほしい」「新聞を読んでいる学生が少ない（時事問題を授業や生徒指導に生かす力も必要）」を基にテーマ設定をすることにした。

具体的には2人一組でチームを組み、「ロールプレイング（気になる子への対応）」と「気になるニュースに関する朝の会」についての生徒指導を協働で考えさせ、それぞれ教師役と生徒役となって交代しながら演じることにした。「ロールプレイング（気になる子への対応）」では、気になる子への指導として『『夢なんかもっていたってどうせ叶いはしない』と発言した生徒がいます。このような生徒に対して、あなたはどのように指導しますか？』という課題³³⁾を考えさせた。「気になるニュースに関する朝の会」では、自身が気になった新聞記事を活用しながら、朝の会で教師としてどのように生徒に指導するかを考えさせた。これらの指導には、指導する教師（学生）の教育観や人生観が現れるところである。なお、これらはシナリオを考えさせた上で演じさせることにした。これは、学生に生徒の様々な反応を熟考させた上で演じさせることに主眼を置くためである。

2.6 外部講師（OGの高等学校教員、教育委員会）による講演

教職実践演習に外部講師（教員経験者）を招聘した授業を導入した先行研究として、下温湯まゆみの研究が注目に値する。下温湯によれば、外部講師による授業を企画する上での留意点として、「授業のねらい・学生に学んでほしい内容を明らかにすること、単発の授業として終わるのではなく授業全体の流れの中に位置付けて専門性を高める内容となること」³⁴⁾としている。また、学生への教育効果として、「外部講師と出会うことに

より、現場をイメージし、身近なモデルとして取り入れることができる」³⁵⁾としている。

この研究を踏まえながら本授業でも外部講師による講演を設定し、OGの現職教員（第11回目）と教員経験者の教育委員会の方（第12回目）を講師として招聘することとした。これらは、各教職実践演習のクラスが一堂に会す合同授業となる。現職教員の講演題目は「学校現場から見た教育課題」、教育委員会の方の講演題目は「教育委員会から見た教育課題」とし、それぞれの違った立場から現代の教育課題について講演（課題提言も含む）をして頂き、学生との意見交換も計画した。なお、勤務する（した）学校や担当する（した）学級の様子、自身の教育観と具体的な教育実践、同僚性の構築や家庭・地域との連携の仕方、社会で働くことの意義等についても併せてお話頂くことにした。

2.7 プレゼンテーション・ソフトを用いた模擬授業開発

教職実践演習に ICT を活用した模擬授業を導入した先行研究として、中和渚の PowerPoint（マイクロソフト社）を活用した研究が注目に値する。中和は、「授業者の学生は模擬授業の計画に際して ICT を利用して教材研究を深め、自己の知識の無さを自覚しながらも情報を取捨選択し、学び続けることのやりがいを感じたことが明らかになった」³⁶⁾とし、教職実践演習における ICT を活用した模擬授業の成果を報告している。また、この中の「ICT を利用して教材研究を深めること」に関連する研究として、大河原清・荻間澤勇人と百瀬の研究がある。大河原・荻間は、教科を対象にしてパワーポイント型プログラム学習教材の作成をさせることは、「概念についての簡潔な文による表現をしなければならないため、大学生自身に深い教材研究をさせるのに向いている」³⁷⁾ことを、百瀬は、

プレゼンテーション・ソフトのスライドで発問を提示するとき、文字の大きさと字数を考慮しながら何度も言葉を精選したことにより、教育実習生の教材研究が深まったこと³⁸⁾をそれぞれ報告している。

一方で、國原は、「多くの大学が本科目の授業で模擬授業を行っているが、教育実習後になぜ模擬授業を行うのかを示していない実践研究も多い」³⁹⁾とし、さらに「就職活動が終わり教員採用試験の結果が出て、学習意欲が低下気味の時期に、全履修生を対象として模擬授業を行い、専門的視点を深めることの意義を再検討する必要がある」⁴⁰⁾と指摘している。國原によれば、「教科の専門的視点を深めることと、生徒理解・指導、対人関係、学級経営の知識や技能を踏まえて学習指導を行うことの必要性を再認識すること」⁴¹⁾に教育実習後に模擬授業を実施する意義があるとしている。

これらの研究を踏まえながら、第10、13回目の授業と14回目の授業前半に模擬授業を設定することにした。まず、学生には國原が指摘した「生徒理解・指導、対人関係、学級経営の知識や技能を踏まえて学習指導を行うことの必要性を再認識すること」に模擬授業設定の意義があることを確認させた。次に、授業方法としてプレゼンテーション・ソフトを活用すること、受講する学生数との兼ね合いから1人5分間授業とすること、扱う教科等は、取得する免許状の教科、道徳科、総合的な学習（探究）の時間、特別活動などから選択すること、発問・指示はスライドで明示し、文字の大きさは32pt以上とすることの授業設計の枠組み4点について説明した。最後に、授業のねらいを明確化させると共に生徒の意識の流れが「えっ」「なるほど」「分かったぞ（頑張るぞ）」となるよう構成し、提示する写真・図等を厳選することを百瀬が設計した「総合的な学習（探究）の時間」の模擬授業を見本として示しながら説明した。以上を基に、取り組ませることにした。

3 授業評価

ここでは、学生を対象に行った受講後のアンケート結果から、授業の各ワークが、学生のどのような能力側面の成長実感を促進したか、あるいはしなかったかを検討する。

3.1 方法

調査方法

第15回目の対象科目の授業の時間を利用して、web フォームにより回答を求めた。当日授業に出席していた36名から回答を得た（回収率100.0%）。一部未回答の項目を含むものがあるため分析は36名を下回る人数で行われる場合がある。

調査項目

「獲得した能力」は、原幸範において示されている11項目⁴²⁾を5件法（5. 当てはまる～1. 当てはまらない）で尋ねた。設問文は「この授業（教育実践演習）を受けて、以下の項目にある力がどれくらい身についたと思いますか。それぞれの項目について当てはまる選択肢を1つ選んでください」とした。項目は「教職への使命感」「対人関係能力」「子どもへの愛着や責任感」「教職員全体と同僚として協力していく能力」「学習指導・授業づくりの力」「学級づくりの力」「常識と教養」「子ども理解力」「豊かな人間性や社会性」「集団指導の力」「教材解釈の力」とした。これらは答申（2006年）が提唱する教員として求められる4つの事項を網羅している

と判断できる。

授業で行なった8つのそれぞれのワークに対する「学び」の程度（以下「8つのワーク」）について5件法（5. 当てはまる～1. 当てはまらない）で尋ねた。設問文は「この授業（教育実践演習）では以下の8つのワークに取り組んでいただきました。それぞれのワークからどれくらい『学び・発見があった』と感じますか。それぞれの項目について当てはまる選択肢を選んでください」とした。8つのワークは「理想の教師像の振り返り」「カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見」「学級経営案の作成」「学級通信の作成」「ロールプレイング（気になる子への対応）」「気になるニュースに関する朝の会」「外部講師による講演」「プレゼンテーション・ソフトを用いた模擬授業開発」とした。「5. あった～1. なかった」の5件法で回答を求めた。

分析

獲得した能力、8つのワークの構造を把握するとともに次元を圧縮するために主成分分析を行った。次に得られた因子間の関係性を把握するために多次元尺度構成法（multi dimensional scaling）を行った。

倫理審査

学習評価のためのアンケート調査については、山梨学院大学倫理審査委員会の審査を受け承認を得た（受付番号19-009）。

3.2 結果

要約統計量

獲得した能力の要約統計量を Table 5 に、8つのワークの要約統計量を Table 6 に整理した。項目間に平均値の差が見られるか検定したところ、獲得した能力にのみ差が見られた ($F(10,320)=2.892, p < .01, \eta^2_p = .083$)。教材解釈の力が、教職への使命感 ($t(32)=4.924, p < .001$)、子どもへの愛着や責任感 ($t(32)=3.721, p < .05$)、対人関係能力 ($t(32)=-4.658, p < .005$) よりも低かった。Table 7 に獲得した能力と8つのワークの単相関行列を整理した。

因子分析

獲得した能力の項目に対し因子数を決定するため対角 SMC、MAP、平行分析を行ったところ、対角 SMC は4因子、MAP は1因子、平行分析は1因子を提案した。1～4因子を指定して主成分分析（プロマックス回転）を繰り返し、因子負荷量、因子の解釈可能性を検討した結果、2因子が妥当と判断した。複数の項目に.40以上の負荷を示す1項目（子どもへの愛着や責任感）を削除し再度主成分分析（プロマックス回転）を施した結果を Table 8 に整理した。第1主成分には「対人関係能力」「豊かな人間性や社会性」などどのような職業についても求められる能力がまとまったため「汎用的技能」と命名した。第2因子には「集団指導の力」「学級づくりの力」など教職に固有の能力がまとまったため「専門的技能」と命名した。2つの因子の平均値を比較したところ差は見られなかった ($t(3) = -0.186, d = -0.136, ns$)。

Table 5 獲得した能力の要約統計量

Item	平均値	SD
教職への使命感	4.42	0.10
子どもへの愛着や責任感	4.30	0.13
子ども理解力	4.15	0.15
集団指導の力	4.06	0.12
学級づくりの力	4.21	0.14
学習指導・授業づくりの力	4.21	0.15
教材解釈の力	3.79	0.11
豊かな人間性や社会性	4.09	0.13
常識と教養	4.15	0.12
対人関係能力	4.39	0.12
教職員全体と同僚として協力していく能力	4.27	0.13

Table 6 8つのワークの要約統計量

Item	平均値	SD
理想の教師像の振り返り	4.38	0.13
カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見	4.32	0.13
学級経営案の作成	4.50	0.11
学級通信の作成	4.44	0.15
ロールプレイング（気になる子への対応）	4.32	0.10
気になるニュースに関する朝の会	4.26	0.10
外部講師による講演	4.26	0.14
プレゼンテーション・ソフトを用いた模擬授業開発	4.56	0.09

Table 7 相関行列

	Q4 教 職への 使命感	Q4 子 どもへ の愛着 や責任 感	Q4 子 ども理 解力	Q4 集 団指導 の力	Q4 学 級づく りの力	Q4 学 習指 導・授 業づく りの力	Q4 教 材解釈 の力	Q4 豊 かな人 間性や 社会性	Q4 常 識と教 養	Q4 対 人関係 能力	Q4 教 職員全 体と同 僚とし て協力 してい く能力
Q5理想の教師像の振り返り	.38*	.36*	-.01	.39*	.40*	.38*	.51**	.20	.38*	.45**	.22
Q5カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見	.43*	.18	.41*	.39*	.36*	.16	.35*	.53**	.28	.70**	.69**
Q5学級経営案の作成	.13	.03	-.06	.17	.06	.23	.15	-.14	.00	.00	-.19
Q5学級通信の作成	.28	.42*	.14	.13	.15	.68**	.24	.11	.16	.19	.06
Q5ロールプレイング (気になる子への対応)	.29 ⁺	.23	.18	.44**	.59**	.39*	.38*	.19	.22	.62**	.47**
Q5気になるニュースに関する朝の会	.29 ⁺	.21	.09	.47**	.38*	.24	.44**	.29 ⁺	.11	.17	.14
Q5外部講師による講演	.34*	.35*	.15	.12	.09	.26	.32 ⁺	.42*	.13	.23	.14
Q5プレゼンテーション・ソフトを用いた模擬授業開発	.17	.07	-.09	.11	.19	.25	.30 ⁺	.23	.05	.36*	.09

**p < .01, *p < .05, ⁺p < .10

8つのワークの項目に対し因子数を決定するため同様の分析を行ったところ、対角SMCは3因子、MAPは1因子、平行分析は1因子を提案した。1～3因子を指定して主成分分析（プロマックス回転）を繰り返し、因子負荷量、因子の解釈可能性を検討した結果、3因子が妥当と判断した。複数の項目に.40以上の負荷を示す1項目（プレゼンテーション・ソフトを用いた模擬授業開発）を削除し再度主成分分析（プロマックス回転）を施した結果をTable 9に整理した。第1主成分には「外部講師による講演」「気になるニュースに関する朝の会」の2つがまとまったため「社会との接点」と命名した。第2主成分には「カルテ・教育実習録に基づく自己課

Table 8 獲得した能力のパターン行列

Item	Component		h2
	1	2	
教材解釈の力	.84		.56
対人関係能力	.76		.55
豊かな人間性や社会性	.73		.66
常識と教養	.64		.51
教職員全体と同僚として協力していく能力	.62		.53
集団指導の力		.95	.80
学級づくりの力		.90	.71
子ども理解力		.65	.52
教職への使命感		.51	.50
学習指導・授業づくりの力		.45	.24
因子寄与	3.53	3.52	

Table 9 8つのワークのパターン行列

Item	Component			h2
	1	2	3	
外部講師による講演	.97			.84
気になるニュースに関する朝の会	.80			.72
ロールプレーイング（気になる子への対応）		1.02		.88
カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見	.63			.58
理想の教師像の振り返り		.50		.55
学級経営案の作成			.90	.82
学級通信の作成			.88	.77
因子寄与	2.30	2.29	2.12	

題の発見」「理想の教師像の振り返り」など教師として役割・アイデンティティ形成に関わる項目がまとまったため「教師役割取得」と命名した。第3主成分には「学級経営案の作成」「学級通信の作成」がまとまったため「学級経営」と命名した。3つの因子の平均値を比較したところ差は見られなかった ($F(2,66)=1.664, \eta^2_p=.048, ns$)。

獲得した能力と8つのワークのそれぞれの因子間の相関係数を整理した (Table10)。獲得した能力の2因子間、8つのワークの3因子間に相関関係が見られた。獲得した能力と8つのワークの関係を見ると、社会との接点、教師役割取得は獲得した能力のうち「社会との接点」「教師役割取得」と相関関係が見られた。

多次元尺度構成法

獲得した能力の2因子と、8つのワーク3因子の関連性を把握するため2次元を指定して多次元尺度構成法 (multi dimensional scaling) を施した (ウォード法、ユークリッド距離)。第1次元を縦軸、第2次元を横軸とした空間布置を Figure 2 に示した。Figure 2 には獲得した能力の2因子と、8つのワーク3因子がそれぞれ配置されている。近くに位置している因子は互いに等質的であり、離れた項目は互いに異質なものと解釈される。

獲得した能力の2因子はともに近傍にあり、2つの因子は互いに関連性が強いことが伺える。8つのワークの3因子は互いに離れた位置関係にあることから、獲得した能力の2因子の関連性に比べれば相対的に関連性は微弱となっていることが伺える。

獲得した能力の2因子は、いずれも教師役割取得のみと近い位置関係にあり、社会との接点、学級経営とは離れていることが見て取れる。教師役割取得を構成するワークにおいて深い学びを得ることが、2つの能力の獲

Table10 因子間の相関行列

	1	2	3	4	5
1 汎用的技能	1.00				
2 専門的技能	.55**	1.00			
3 社会との接点	.35*	.35*	1.00		
4 教師役割取得	.68**	.58**	.49**	1.00	
5 学級経営	.11	.32 ⁺	.33 ⁺	.39*	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

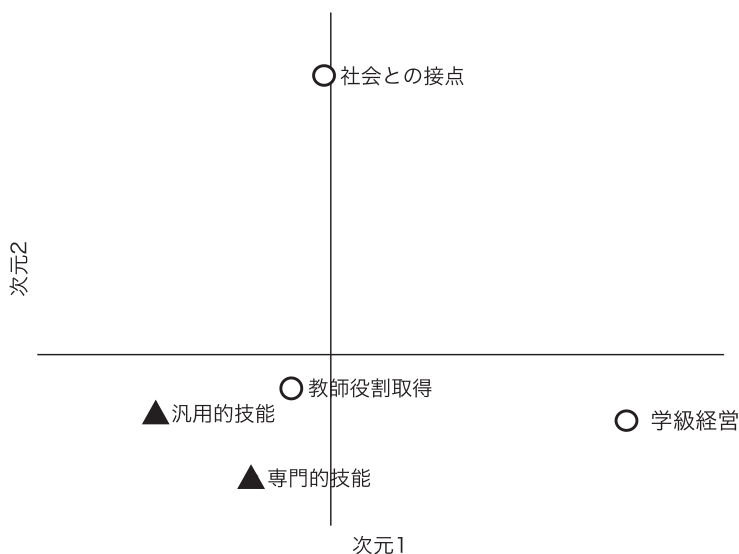


Figure2 獲得した能力と8つのワークの多次元尺度構成法の結果

Note ▲は「獲得した能力」の下位因子、○は「8つのワーク」の下位因子を表す

得を強く条件づけているといえる。

3.3 考察

分析の結果、本授業を通して得られた能力は大きくは「汎用的技能」「専門的技能」の2因子として把握されていること、本授業の教育プログラムは「社会との接点」「教師役割取得」「学級経営」の大きくは3つのプログラムからなると理解されていることが見えてきた。本授業を通して能力の獲得を自覚した学生は、主に「教師役割取得」に属する「ロールプレイング（気になる子への対応）」「カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見」「理想の教師像の振り返り」から、多くの学び・気づきを得たと感じる傾向にあることが明らかとなった。

特徴的であったのは、第1に、「汎用的技能」「専門的技能」の両者の間に学びの意識に差が見られなかったことである。教職実践演習は教育実習等の補完科目に位置づけられていることから、教授方法等の教職固有の技能の習得に学びの意識が偏向する可能性があったと思われるが、そのような傾向は見られなかった。考えられる理由としては、学生側の要因として、多くの学生は教職には就かず、民間・行政等への就職ないし進学することから、自らのその後の進路と結びつきやすい汎用的技能について学びが意識された可能性がある。さらに、学生たちが教職者に望まれる技能が専門的技能から汎用的技能まで多岐にわたることを十分に理解していたことに由来する可能性もある。授業側の要因としては、ワークの内容が汎用的技能と専門的技能の両者に対し学びを感じさせるプログラムとなっていた可能性がある。

第2に、汎用的技能、専門的技能の両技能の学びの意識を最も強く促進したワークが教師役割取得に内属するワークであった点も特徴的であった。

当該因子は「ロールプレイング（気になる子への対応）」「カルテ・教育実習録に基づく自己課題の発見」「理想の教師像の振り返り」の3つのワークからなっていたが、最も中心的だったのは（因子分析における因子負荷量に立脚すれば）「ロールプレイング（気になる子への対応）」のワークであった。このワークが2つの技能の学びの意識につながった理由としては、扱ったトピックが「気になる子」であった点、あるいは「ロールプレイング」というワークの手法を採用したこと、など複数の要因が考えられる。「気になる子」は教職としての課題を超えて、発達障がい等の支援等、より広域な社会的課題に接続されるトピックであり、学生にとってインパクトが大きかった可能性がある。教師がカバーすべき職能や必要となる職業訓練の広さ、深さ、専門性の高さにショックを受けたかもしれない。ロールプレイングは、座学、通常のアウトプット型の授業と異なり、文字通り異なる役割・視点を取得しこれを反復・運用する経験である。こうした授業展開・授業体験は稀である可能性がある。このような新しい視点を取得することのインパクトが影響している可能性が考えられる。この点はトピックを変更する、ロールプレイング以外の手法でプログラムを組むなど、要因計画法を用いた検討を行うことで明らかにしていくことができる。

4 おわりに（総合考察）

百瀬が開発した教職実践演習の授業は、答申（2006年）の提唱する教員として求められる4つの事項を忠実に実現すること、学生の授業に対するモチベーションに配慮すること、教育実習校の指導教諭からの評価に対応すること、の3つのポイントを重視して組み立てられた。

授業評価の結果、答申（2006年）が提唱する教員として求められる4つ

の事項をバランスよく実現していると考えられる。しかし、バランスはよくとも、全体として十分な水準に達しているといえるかどうかは別途検討が必要である。縦断データを取得して複数年度のデータを構築して効果性を精査する、あるいは類似の他の授業との比較を行うなどベンチマークを参照する等の調査分析を要する。

教育実習校の指導教諭からの評価への対応としては、シラバスの構築という意味では全ての評価項目について一定程度の学習機会が網羅されていたといえる。一方、実際の学習到達度として十分かどうかについては、本稿で扱ったデータの範囲ではこれを判断することは難しいといえる。授業を通して、学生たちは毎時間一定のアウトプットを出しており、また担当教員がこれをパフォーマンス評価している。しかしながら、実際の学習到達度を十分に評価するためには、教育実習校の指導教諭に学生からのアウトプットを評価してもらうなどの外部評価作業も必要となる。この点については今後の課題としたい。

注・引用文献

- 1) 本稿の執筆は、第1章・第2章を百瀬が、第3章・第4章を石川がそれぞれ担当した。
- 2) 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006年7月11日）、
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm（2020年2月6日検索）
- 3) 笠井尚・三島浩路「教育実習を活かした教職実践演習の取り組み」『教師教育研究』（28）、全国私立大学教職課程研究連絡協議会、2015年、pp.109-119。
- 4) 大久保英敏・日下芳朗・小酒井正和・塩澤秀和「教育実習事後アンケート調査と教職実践演習の授業計画」『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』（7）、玉川大学教師教育リサーチセンター、2016年、pp.73-83。
- 5) 菅野治恵「本学における『教職実践演習（理科）』の概要と課題」『城西大学教職課程センター紀要』（1）、城西大学教職課程センター、2017年、pp.55-69。

- 6) 永田成文「授業実践力を高める教育実習を基盤とした教職実践演習—協動的な学びによる授業の改善と実践を通して—」『三重大学高等教育研究』(24)、三重大学地域人材教育開発機構、2018年、pp.55-64。
- 7) 藤井剛「教職実践演習に関する一考察」『明治大学教職課程年報』(40)、明治大学教育実習指導室、2017年、p.29。
- 8) 前掲書 2)、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm (2020年2月6日検索)
- 9) 前掲書 2)、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm (2020年2月6日検索)
- 10) 前掲書 7)、p.29。
- 11) 箱田忠昭『「できる人」の話し方&コミュニケーション術 なぜか、「他人に評価される人」の技術と習慣』フォレスト出版、2005年、pp.100-103。
- 12) 百瀬光一・下崎聖「特別支援学校に在籍する生徒のコミュニケーション能力を高めるための教材・単元開発に関する研究—クラス集団内での共同学習を通して—」『山梨学院大学法学論集』(74)、山梨学院大学法学研究会、2014年、pp.116-99。
- 13) 百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究—アクティブ・ラーニングの視点をういた教材開発を通して—」『教材学研究』(28)、日本教材学会・編集委員会、2017年、pp.93-104。
- 14) 百瀬光一・下崎聖「特別活動を中核としたキャリア教育に関する研究—特別活動と教科等の関連を中心として—」『山梨学院大学法学論集』(80)、山梨学院大学法学研究会、2017年、pp.79-112。
- 15) 前掲書12)、p.111の表2を参考に作成。
- 16) 百瀬光一・下崎聖「主体的・対話的で深い学びを実現するための総合的な学習の時間の単元開発に関する研究—自己のキャリア形成に関する学習活動の設定を通して—」『山梨学院大学法学論集』(81)、山梨学院大学法学研究会、2018年、p.87の表4を参考に作成。
- 17) E・デボノ(著)・松本道弘(訳)『デボノ博士の[6色ハット]発想』ダイヤモンド社、1986年。
- 18) NHK『テストの花道』制作チーム『テストの花道』河出書房新社、2011年、pp.126-131。
- 19) 前掲書16)、pp.75-105。
- 20) 國原幸一朗「実践的指導力習得に向けた『教育実践演習』の視座」『名古屋学院大学論集.社会科学篇』53(1)、名古屋学院大学総合研究所、2016年、p.125。
- 21) 石井康博「教員志望学生を対象とした学級経営案作成過程の検討—模擬保護者会

- の実践を通して—』『日本教育工学会研究報告集』18(2)、日本教育工学会、2018年、p.128。
- 22) 同上書21)、p.128。
- 23) 安彦忠彦「まず『学級経営案』の改善を!」『現代教育科学』33(1)、明治図書出版、1990年、p.6。
- 24) 前掲書20)、p.125。
- 25) 前掲書20)、p.125。
- 26) 高橋喜代治「教職実践演習を深める—学級通信づくりと再現自己紹介で—」『教職研究』(27)、立教大学学校・社会教育講座教職課程、2015年、p.105。
- 27) 同上書26)、p.105。
- 28) 多和田真理子「教職実践演習における『学級通信』の作成指導について」『國學院大學教育学研究室紀要』(54)、國學院大學教育学研究室、2019年、pp.1-12。
- 29) 同上書28)、p.12。
- 30) 前掲書20)、pp.103-139。
- 31) 三島知剛・樫田健志・高旗浩志・稲田修一・後藤大輔・江木英二・曾田佳代子・山根文男・加賀勝・高塚成信「全学教職課程における『教職実践演習への取組』(3)—平成25年度受講生アンケート結果による検討—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』(5)、岡山大学教師教育センター、2015年、pp.19-25。
- 32) 宮下与兵衛「ロールプレイングによる教職実践演習」『首都大学東京教職課程紀要』(1)、首都大学東京教職課程紀要編集委員会、2017年、pp.145-152。
- 33) 野口芳宏『2014年版 模擬授業・場面指導』一ツ橋書店、2012年、p.169を基に作成。
- 34) 下温湯まゆみ「『教職実践演習(幼稚園)』における学びの効果—外部講師(教員経験者)による講演と授業展開を取り上げて—」『京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センター研究報告書』(5)、京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センター、2017年、p.17。
- 35) 同上書34)、p.15。
- 36) 中和渚「私立大学の教職実践演習における小学校教員志望学生の学び—総合的な学習の時間の模擬授業におけるICTの活用—」『未来の保育と教育:東京未来大学実習サポートセンター紀要』(4)、東京未来大学実習サポートセンター、2017年、p.89。
- 37) 大河原清・荻間澤勇人「文を効率的に覚えてもらう指導方法—パワーポイント型プログラム学習教材の作成と利用—」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』(14)、岩手大学教育学部附属教育実践総合センター、2015年、p.360。

- 38) 百瀬光一「プレゼンテーション・ソフトを活用した授業設計に関する一考察—教育実習における教科指導での活用を想定して—」『山梨学院大学法学論集』(78)、山梨学院大学法学研究会、2016年、p.64。
- 39) 前掲書20)、p.108。
- 40) 前掲書20)、p.108。
- 41) 前掲書20)、p.126。
- 42) 原幸範「教師に求められる資質能力について—教職志望学生の『教員に求められる資質能力』に関する意識を探る—」『久留米工業大学研究報告』(40)、久留米工業大学研究報告編集委員会、2018年、pp.114-125。